

和歌史における「霞」の変遷

——『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』をめぐって——

大 場 美 波

はじめに

「霞」という語を『日本国語大辞典』で調べると、「空气中に広がった微細な水滴やちりが原因で、空や遠景がぼんやりする現象。また、霧や煙がある高さにただよつて、薄い帯のように見える現象。比喩的に、心の悩み、わだかまりなどをいうこともある。」という説明がある(注一)。また『歌枕大辞典』では、歌ことばとしての「霞」の変遷について、『万葉集』において霞は多く春のものとして扱われていること、『古今集』以降の霞は、春の到来や春らしい風景を象徴すること、遠くにある見たいものを隔てたり隠したりするという性質を持ちそれが恋歌にも転じていることなどを指摘している(注二)。和歌の世界において「霞」は、やがて春の景物としての座を確立するとともに、その景状と人々の美意識や心情などが関わり合い、様々な歌境を生み出しているようである。そして、「霞」が生み出すイメージは、時代を経ることに少しずつ変遷し、発展していることがわかる。そこで本稿では、『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』における「霞」を詠んだ歌を取り上げ、その特徴や変遷を探ってみたいと考える。第一章では『万葉集』、第二章では『古今和歌集』、第三章では『新古今和歌集』の「霞」について考える。特に、それぞれの歌集における固有の特徴や共通する特徴を考察するとともに、それぞれがどのように影響を及ぼし合い、「霞」に新たな価値を見出しているのかについて考えたい。また、それぞれの歌集全体の傾向と、収録された「霞」を詠んだ歌の特徴に関係性を見出せるかどうかについても検討してみたい。そして、古来から和歌の世界で親しまれてきた「霞」という景物に新たな光を当てるとともに、「霞」を通して映される人々の心についても考えを巡らせてみたい。

第一章 『万葉集』の「霞」

まず、第一章では、『万葉集』の「霞」について考える。『万葉集』の長歌・短歌には「春霞」「朝霞」といった熟語や、枕詞「霞立つ」を含めて七十七例の「霞」がある。万葉の霞は、「霞立つ（ち）」（十六例）、「霞たなびく（き）」（二十五例）といった類句をなし、「霞立つ春」や「霞たなびく……春来たるらし」のような決まり文句の中に現れることが多い。ここでは、「雑歌」と「相聞」それぞれの部立において詠まれる「霞」の特徴を考えてみたい。まず、雑歌において「霞」が詠まれる歌を取り上げる。

① 霞立つ長き春日をかざせれどいやなつかしき梅の花かも

（八四六・小野氏淡理）

② 霞立つ野の上の方に行きしかばうぐひす鳴きつ春になるらし

（一四四三・丹比真人乙麻呂）

③ ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも

（二八一二・よみ人しらず）

④ 見渡せば春日の野辺に霞立ち咲きにほへるは桜花かも

（二八七二・よみ人しらず）

①では「霞立つ」が「長き春日」を導いている。②からは「霞が立ち鶯が鳴くから春が来た」という当時の季節感を窺うことができる。③は②と同様の趣向で、霞がたなびく様子が春の到来を告げるものとして詠まれている。④は「霞」と「桜」の組み合わせが見られる。このように、雑歌では、「霞」が春の風景や春の到来を象徴するものとして詠まれたり、「霞」と「桜」の組み合わせが見られたりすることがわかる。次に、相聞において「霞」が詠まれる歌を取り上げる。

⑤ 春日山霞たなびき心ぐく照れる月夜にひとりかも寝む

（七三五・坂上大嬢）

⑥ 心ぐく思ほゆるかも春霞たなびく時に言の通へば

（七八九・大伴家持）

⑦ 霞立つ春の永日を恋ひ暮らし夜も更け行くに妹も逢はぬかも

（一八九四・柿本人麻呂）

⑧ 春の野に霞たなびき咲く花のかくなるまでに逢はぬ君かも

（一九〇二・よみ人しらず）

⑨ 遠山に霞たなびきいや遠に妹が目見ねば我恋ひにけり

（二四二六・柿本人麻呂）

⑤では霞がたなびき月の光がほんやりと差すという夜景が、詠者のすつきりとしない心情に奥行きを与えている。⑤における「霞」には、晴れない心や不安な気持ち、心の中で思い悩むような気持ちを映し出すという効果を見出すことができる。⑥は、藤原朝臣久須磨呂からの自分の娘への求婚に、娘の父である大伴宿禰家持が答えて贈った一首であり、ここでの「霞」は、久須磨呂からの求婚に悩んですつきりとしなない父の心情を喩えたものである。⑤、⑥は、「心ぐく」という言葉からも読み取れるように、「心が晴れずすつきりとしなない状況」と「霞」が重ねられているという点が共通している。⑦において、霞が立ち込めるという状況は、逢いたい人に逢えずじれったく思う気持ちや、そのような状況下で恋しい人を待ち焦がれる気持ちを増幅させるものであると考えられる。⑧では、④と同様に「霞」と「花」の組み合わせが見られる。⑨では、霞がたなびきより遠くに感じる山と、長い間逢うことができないうために遠くに感じる恋慕う人とが重なる。ここでは「何かを隔てる」という「霞」の特性が効果的に用いられ、距離的に、また時間的に隔られた人のことを恋しく思う気持ちが表現されている。何かを遮ったり、朦朧とした不鮮明な情景を生み出す「霞」の特性が、恋をする人の心境を表すのにも効果的に用いられていることがわかる。

そのほか、「霞」を用いて春の憂いを詠った歌もある。

⑩ あしひきの八つ峰の雉鳴きとよむ朝明の霞見れば悲しも

(四一九九・大伴家持)

⑪ 春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも

(四二九〇・大伴家持)

⑩は夜明けの雉の鳴き声や霞が、暁に相手と別れる辛さに同情を誘うものとして詠まれている。⑪は春を象徴するよな場面であるが、詠者はいつかは過ぎ去ってしまう春や時の儚さを感じ感傷的な気分浸っている。⑩、⑪では「霞」が愁いや切なさを増幅させる景物として詠まれているが、ここにも「霞」の持つ多様性を垣間見ることができるとは言えないだろうか。

また、「霞」と組み合わせて用いられる動詞は「立つ」や「たなびく」が多いが、これらの違いについても指摘したい。「霞立つ」という表現は、「霞たなびく」の場合と比較すると、①、②、⑦などのように「霞」の出現や存在、その時空間を切り取ることに重みが置かれている傾向があると考ええる。一方、「霞たなびく」という表現は、⑤、⑥、⑨の

ように「霞」が空中にぼんやりと漂うという実景に結びついたものであり、それが人々のすっきりとしない心情と重ね合わせられ、相聞において用いられることが多い。このように、「霞」が「立つ」か「たなびく」かによってその意味合いは微妙に異なっているということが読み取れる。

さらに、鈴木宏子氏は、『万葉集』における「霞」は、「他の景物との組み合わせよりも、朝・夕・夜の時刻や、野や山などの場所との結びつきの中に見出される」ことを指摘している（注三）。これまで挙げた和歌で検討すると、③、⑤、⑨は「山」と、④、⑧、⑪は「野」と結びついている。さらに⑩は「朝」と、③、⑪は「夕」と、⑤、⑦は「夜」と結びついている。また鈴木氏によると、『万葉集』において、「霞」と春の景物である桜などの「花」との結びつきはほとんど見られないという。しかし、④、⑧のように「霞」と「花」という春の景物を組み合わせることで全くと見られないわけではないということもわかった。

以上、『万葉集』において「霞」が詠まれる歌を見てきたが、主に四つの特徴が考えられる。

一つ目は、②、③などのように、「霞」は春の風景や春の到来を象徴するものとして詠み込まれることが多いということだ。「霞がたなびいているから春が来た」という発想が見られることも特徴である。同時に、霞が導く春の到来は、⑪のように喜ばしいだけでなく愁いや切なさをもたらすという捉え方もあったことがわかる。

二つ目は、⑨のように「霞」が表す「何かを遮るもの」としての特性が相手との距離や時間の隔たりを表したり、⑤、⑥、⑦のように朦朧とした不鮮明な情景が人々の「すっきりしない心情」や「不安な心境」を表現したりするということである。相聞において「霞」が詠まれることが多いのは、「霞に煙る春景のおほつかなさ」と、「恋をしている人の晴れやらぬ思い」が重ね合わせられているためと考えることができるだろう。また、相聞の中でも⑤、⑦、⑧、⑨などは、恋人と逢うことができない時の心情を詠んだものであると考えられる。そのような場面で「霞」が用いられることが多いということも指摘できる。

三つ目は、④、⑧のように他の春の景物と組み合わせる場合が、少ないながらも存在していることである。④、⑧では、「霞」と「花」の二つが春の野という空間に取り込まれており、『万葉集』において「霞」と「花」が詠まれる

場合、この二つの景物は時と場を同じくしているということが考えられる。

四つ目は、「霞」が「立つ」場合と「たなびく」場合、表現されるイメージに違いが見られるということである。「霞立つ」という表現は、①、②、⑦などのように「霞」の出現や存在、その時空間を切り取ることに重みが置かれている傾向が見られた。それに対して「霞たなびく」という表現の場合、⑤、⑥、⑨のように「霞」が空中にほんやりと漂うという実景と、人々のすつきりとしなない心情が結びつくことがあるということがわかった。

このように、『万葉集』における「霞」は、「春」という季節と結びつくことがあるだけでなく、「花」との組み合わせが見られたり、その特性から、恋をしている人や恋人と逢うことのできない人の晴れやらぬ思いを表したり、様々な機能や効果を見出せることがわかった。これらをふまえ、第二章では『古今和歌集』において「霞」がどのように詠まれているのかを考えてみたい。

第二章 『古今和歌集』の「霞」

第一節 『古今和歌集』「春歌上・下」における「霞」

第二章では『古今和歌集』において「霞」がどのように詠まれているのかについて考える。鈴木宏子氏は、『古今和歌集』においては三十例の「霞」があり、そのうち十四例が「花」とともに詠まれていることを指摘している（注四）。第一節ではまず、『古今和歌集』「春歌上・下」における「霞」について考えたい。次に挙げるのは、『古今和歌集』「春歌上・下」における「霞」が詠まれた十四の歌である。

- ① 春霞たてるやいづこみよしのの吉野の山に雪はふりつつ
（三・よみ人しらず）
- ② 霞たち木の芽もはるの雪降れば花なき里も花ぞ散りける
（九・紀貫之）
- ③ 春のさる霞の衣ぬきを薄み山風にこそ乱るべらなれ
（二三・在原行平朝臣）
- ④ 春霞立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる
（三一・伊勢）

- ⑤ 山桜わが見にくれば春霞峰にも尾にも立ちかくしつづ (五一・よみ人しらず)
- ⑥ 誰しかもとめて折りつる春霞立ちかくすらむ山のさくらを (五八・紀貫之)
- ⑦ 春霞たなびく山の桜花移ろはむとや色かはりゆく (六九・よみ人しらず)
- ⑧ 春霞なに隠すらむさくら花散るまをだにも見るべきものを (七九・紀貫之)
- ⑨ 花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山かぜ (九一・良岑宗貞)
- ⑩ 三輪山をしかも隠すか春霞人に知られぬ花や咲くらむ (九四・紀貫之)
- ⑪ 春霞色のちくさに見えつるはたなびく山の花の影かも (一〇二・藤原興風)
- ⑫ 霞立つ春の山辺は遠けれど吹きくる風は花の香ぞする (一〇三・在原元方)
- ⑬ 花の散ることやわびしき春霞たつたの山のうぐひすの声 (一〇八・藤原後蔭)
- ⑭ 惜しめどもとどまらなくに春霞帰る道にし立ちぬと思へば (一三〇・在原元方)
- これら十四の歌のうち、「花」と「霞」が結びついて詠まれる歌は十一首ある。②、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬である。鈴木宏子氏はこのことをふまえ、『古今集』四季歌の霞は、〈花と霞の組み合わせ〉を表現の中心にしているといっても過言ではない。と述べている(注五)。そこでここでは、これらの歌を具体的に解釈しながら、「花」と「霞」の組み合わせにおいて「霞」が果たす役割を中心に検討してみたい。特に、「霞」が「花」を「隠す」ものとして機能している点、「霞」と「色」が結びついている点、「花」、「霞」、「風」の組み合わせが見られる点などについて指摘したい。
- ②は、春の季語として「霞」が詠まれ、「雪」が春を象徴する「花」に見立てられている。
- ④は、「春霞」が伊勢、秋の深まりとともにやってきて春たけなわの中を帰っていく「雁」が伊勢が思いを寄せる男性、という解釈ができる。「春霞」が女性や自分自身に喩えられることもあるということがわかる。
- ⑤では、詠者は霞が桜を隠すことを嘆いている。鈴木宏子氏は⑤の歌について、「見たいと思う桜を、霞が峰にも尾にも立って隠している」という歌であり、霞と桜の間には「隠す・隠される」という関係が見出されている。」と述べ

ている（注六）。そして、『古今和歌集』の〈花と霞の組み合わせ〉の歌は、その「隠す・隠される」という関係に基づくものが多いことを指摘している。対象を「隠す」という「霞」の特性は、『万葉集』にはあまり見られなかったものであり、『古今和歌集』独自の特徴として挙げられる。

⑥は、⑤と同様に山の桜を「隠す」ものとして「霞」が用いられている。ここでは、花を隠す「霞」も花と同様に美しい景物として詠まれている。ここでの「霞」は、桜を隠すことによって桜の美しさや神秘性を際立たせ、人々が思いを寄せる桜を「見たい」と思う気持ちを掻き立てるような役割をしているのではないかと考える。また、詠者の眼前にあるのは一枝の「折れる桜」である。この一枝から、桜を隠していたはずの「霞」が想起され、花を求めて中に入った人のことが思われる。

⑦における「春霞」は、中国的な茜色を帯びた霞をいうとされる。花の色の移ろいに寄せる詠者の心が窺える。

⑧は、⑥や⑩と同様に、「霞」が花を隠すという情感を背景に、桜を惜しむ心を詠んでいる。ここで「霞」は「散る桜」までも隠している。

⑨は、「霞」、「花」に加え「風」が詠まれることや、「霞が花の色を閉じ込める」ということが特徴であると言える。花の姿は見えないが「風」が伝える香によって花の存在を知るという点で、⑫との共通点を見出すことができる。「霞」に隠され「花」の存在が見えないからこそ、その匂いを運ぶ「風」が果たす役割は大きい。この点に、「霞」、「花」、「風」という組み合わせの巧妙さが窺える。

⑩は、「霞」から「花」が連想され、「隠す」、「隠される」という「霞」と「花」の関係性が強く意識された歌であると言える。

⑪は、山の花に映じて霞が様々な色に見える様子を詠っている。詠者は花の色や影が霞に映じる様子を見て霞に隠された花の存在に思いを馳せており、ここでも「霞」が「花」を「隠す」ことで生まれる心の動きが表現されている。

⑫は、「霞」、「花」、「風」という三つの組み合わせが⑨と共通している。

そのほか、①では霞が立つことが春の到来を象徴するものとして詠まれている。③は春を生命のあるものとして見て

おり、風に乱れ消えてしまうような「霞」の儂さが、春という季節の心もとなさと結びついている。⑭は霞が「立つ」ことと出発するという意味の「発つ」をかけている。春霞が「立つ」と言えば「現れる、立ちこめる」という意味であることが多いが、それを春が帰途に「発つ」という意味に転用したところに面白さがある。⑬では霞が「立つ」ことと「たつたの山」が掛けられている。

以上、『古今和歌集』「春歌上・下」において「霞」が詠まれる歌のうち、主に「霞」と「花」の組み合わせが見られる歌十一首を取り上げた。これらを整理すると、いくつかの歌に共通するものとして、次の三つの特徴が挙げられると考える。

一つ目は、⑤、⑥、⑧、⑨、⑩、⑪のように「霞」が「花」を隠すものとして機能していることだ。ここで「霞」と「花」には、「隠す」「隠される」という関係性を見出すことができる。そして、このような「霞」と「花」の関係性は、『古今和歌集』において多く見られるということも指摘できる。このことについて窪田空穂氏は、「見たい」と思う美しいものを、それを秘めて見まいとするものがあって、憧れに終わらせるというこの当時に共通の耽美的部分が反映されている。」と指摘している。その上で、「「隠すもの」としての霞と関係づけることで、見る者の花に寄せる切ない愛情がくつきり浮かび上がる。」と述べている（注七）。美しいもの、人々が「見たい」と憧れや興味を抱くものと、それを秘め隠してしまう「霞」の関係や、それを見る人々の心の動きは、当時の人々の美意識にも関係するものであったと考えられる。また『万葉集』では、「霞」や「花」が春の風景や季節感を表現しているのが特徴であったが、『古今和歌集』では、「花」を「隠す」という「霞」の特性が用いられるようになり、「霞」が、隠された「花」の存在について読者の想像を豊かに広げる役割を果たしていることがわかる。

二つ目は、⑦、⑨、⑪のように「霞」と「色」が結びつき、「霞」が花の色を閉じ込めたり、花の色を映し出したりしていることである。そして、⑨、⑪のように詠者は霞に閉じ込められた色や映し出された色から「花」の存在を感じ、「霞」が、はつきりとは見えないものに対する好奇心や憧れをより一層掻き立てるような役割をしていることがわかる。また、「盛りをすぎると散ってしまう花」のように、詠者は、壊れやすく脆いものや盛りの後の移ろいに思いを馳せて

いるということも読み取れる。

三つ目は、⑨、⑩のように「霞」「花」「風」の三つが組み合わせられて詠まれることがあるということである。「霞」が隠した「花」の存在を「風」が知らせるといふ点で、「霞」「花」「風」の組み合わせは巧妙であると言える。

以上、『古今和歌集』「春歌上・下」における「霞」について、主に三つの特徴を挙げた。第二節では、第一節をふまえ、『古今和歌集』「恋歌」における「霞」について考えてみたい。

第二節 『古今和歌集』「恋歌」における「霞」

第二節では、『古今和歌集』「恋歌」における「霞」について考える。特に、『古今和歌集』「春歌上・下」と同様に「霞」と「花」の組み合わせが見られる点、「花」を隠す「霞」の特性が恋い慕う相手への思いや執着を増大させる効果をもたらしている点などを指摘したい。まず、『古今和歌集』「恋歌」において「霞」が詠まれている全三首を挙げる。

① 山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ

(四七九・紀貫之)

② 君によりわが名は花に春霞野にも山にも立ちみちにけり

(六七五・よみ人しらず)

③ 春霞たなびく山の桜花見れども飽かぬ君にもあるかな

(六八四・紀友則)

①は、「霞」と「桜」の組み合わせが見られ、「霞」が美しいものを隠すものとして用いられている。山桜が「霞の間」から「ほのかに」見えるからこそいっそうの見たさを誘われるように、ほのかに見た人をより一層恋い慕う気持ち詠まれている。これは、第二章第一節で述べた、「花」を隠す「霞」の特性が効果的に用いられていると言える。また、桜や女性がわずかに見えるという状況は、それらが霞がかかった不鮮明な情景の間にふと現れる鮮明さや、それらを垣間見た一瞬のときめきを、より際立たせているように感じられる。

②も、①と同様に「霞」と「花」の組み合わせが見られる。「たち満ちにけり」の「たつ」は、「霞が立つ」の意と「噂が立つ」の意を掛けている。立つと同時に広範囲に広がる「霞」の特性が、「噂」がすみずみにまで広がる様子を表現するのに効果的に働いていることがわかる。『万葉集』において「霞」が「立つ」ということは、「霞」の出現や存

在、その時空間を切り取ることに重みが置かれる傾向がある」ということを指摘した。そのような「立つ」という表現の特性は、噂が一時的に湧いて浮かび上がるという意味での、噂が「立つ」という状況や表現につながっているように思う。また『古今和歌集』「春歌上・下」では、「霞」が「花」を「隠す」という関係性が見られたが、②においても、隠されたものの正体が定かではないからこそ「知りたい」、「見たい」という気持ちがあり、その気持ちにより「噂」がすみずみまで広がっていく様子が想像できる。「霞」と「花」と、「噂」と「噂の対象」の関係や特性には共通する部分があるのではないかと考える。

③は、美しい女性を山桜に喩えており、春を代表する「霞」や「桜」という景物が恋歌に効果的に用いられている。以上のように、『古今和歌集』「恋歌」において「霞」が詠まれる三首には、全て「霞」と「花」の組み合わせが見られた。①では、わずかに垣間見た女性への恋心が、美しい「桜」とそれを隠す「霞」という景物を用いて表現されている。②は、「たつ」という言葉に、「霞が立つ」と「噂が立つ」ことの二つの意味が掛けられている。花を隠す霞が空中に漂い広がる様子は、噂が広がっていく様子を連想させるものであるとも言える。③では、恋慕う人への思いが、「霞」と「桜」という春の代表的な景物に寄せて表現されている。

また片桐洋一氏は、『古今和歌集』について、全体を通して「過ぎ去りゆくものや過ぎ去りゆく人生を惜しむ姿勢」が見られることを指摘している。そして『古今和歌集』の和歌は『万葉集』の和歌と比較し、対象そのものを詠むというよりも対象に寄せる自らの「心」を詠んでおり、「恋歌」に関しても「待つ恋」や「惚ぶ恋」など、相手に寄せる切実な思いを詠んだものが多い」ということを指摘している（注八）。『古今和歌集』において「対象に寄せる自らの心」を詠んでいる歌が多い」という片桐氏の指摘をふまえると、『古今和歌集』において「霞」が詠まれる場合、四季の歌、恋歌のどちらにおいても、「霞」が「花」や「恋慕う人」などの対象を隠したり隔てたりすることで、対象に寄せる詠者の「心」の表現の幅が広がるのではないかと考えた。

以上、『古今和歌集』「恋歌」において「霞」が詠まれる歌について、その特徴や共通点などを考えた。第三節では、『古今和歌集』「春歌上・下」や「恋歌」以外で「霞」が詠まれる歌について調査し、それらを解釈しながらその特徴を

考えていきたい。

第三節 『古今和歌集』『春歌上・下』、「恋歌」以外における「霞」

以下、「春」や「霞」と、「雁」の結びつきが見られる点、「春霞」から「都」が連想される点、「霞」が死者を象徴する歌で用いられる点、浮気な人を喩えることがある点などを指摘したい。そして、『古今和歌集』全体の傾向と、霞を詠んだ歌の数の多さとの関係についても考察してみたい。全八首を取り上げる。

① 春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴くなる秋霧のうへに

(秋歌上・二一〇・よみ人しらず)

② 消ぬがうへにまたも降りしけ春霞立ちなばみ雪まにこそ見ぬ

(冬歌・三三三・よみ人しらず)

③ かへる山ありとは聞けど春霞立ち別れなば恋しかるべし

(離別歌・三七〇・紀利貞)

④ 山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ

(羈旅歌・四一三・乙)

⑤ 草深き霞の谷に影かくし照る日のくれし今日にやはあらぬ

(哀傷歌・八四六・文屋康秀)

⑥ かずかずに我を忘れぬものならば山の霞をあはれとは見よ

(哀傷歌・八五七・敦慶親王)

⑦ 春霞たなびく野辺の若菜にもなりみてしがな人も摘むやと

(雑体歌・一〇三一・藤原興風)

⑧ 思へどもなほうとまれぬ春霞かからぬ山のあらじと思へば

(雑体歌・一〇三二・よみ人しらず)

①では、「霧」が対象を「隠す」ものとして用いられている。「霧」は、目には見えないが鳴き声が聞こえることで「雁」の存在が想起される、という状況を作り出すのに効果的な役割を果たしている。また、ここで「霞」は『万葉集』の場合と同様に春の到来を象徴するものとして用いられている。「春」と「秋」、「霞」と「霧」など季節や季語の対比に加え、「春」や「霞」と、「雁」の結びつきも見られる。

②について、「霞が立つ」ことは「春が来る」ことを表すが、それは同時に「雪が消える」ということを意味する。

『万葉集』において多く見られたような、「霞がたつから春が来た」という発想がさらに発展していることが読み取れる。

③の詞書には、「越へまかりける人によみてつかはしける」とある。③において「霞」が「たつ」ことは「別れ」の

場面で用いられており、別れの悲哀に加え風流な風景も強く印象づけられている。また、「霞」が隔てた先との「距離」を想起させることや、「霞」と「都」が結びつくということも③の特徴の一つである。「霞」と「都」が結びつくという特徴は、「山たかみ都の春を見渡せばただひとむらの霞なりけり」（後拾遺和歌集・三八・大江正言）、「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞふく白川の関」（後拾遺和歌集・五一八・能因法師）などにも見られる。③からは、「都」を離れることの名残惜しさや切なさ、「霞」が広がる風景とともに想像されるように思う。

④で「霞」は、「山」を「隠す」もの、「行き先の見当をつけることを遮るもの」として機能している。ここで詠者は、帰京の途中に「霞」に「都」を隠され鬱々とした気持ちを詠んでいる。

⑤について、『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』では、「天皇や皇族の死を落日にたとえることは宮廷詩歌によく見られるが、日の落ちる所を「霞の谷」としたのは葬儀の時の実景からの連想であろう。」という解説がある（注九）。⑥は死を予期した妻の辞世の歌で、自分の火葬の煙を霞に喩えている。

また、⑤と⑥は「死を象徴した歌」という共通点がある。このことについて大野ロベルト氏は、「霞」の何かを「隠す」という性質に着目し、「ここでは霞は、人をこの世から永遠に「隠して」しまうのである。」と述べている（注十）。『古今和歌集』では、「霞」の対象を「隠す」という性質が多く用いられていたが、その点に着目すると、「霞」は花や山、都だけでなく、人をもこの世から永遠に隠してしまうという見方もできるだろう。

⑦からは、霞がたなびく「春」という季節から「若菜摘み」を連想するという当時の発想が窺える。

⑧における「霞」は浮気な人を喩えたものである。「かかる」は、「霞がかかる」の意味と「人があちこちに関わる（関係する）」の二つの意味が掛けられている。『古今和歌集』「恋歌」においては、噂が広がる様子と霞が立ち広がる様子を重ね合わせて表現された歌が見られたが、「あちこちにかかり、立つては消える」という「霞」は、「噂」や「浮気な人」を表現するのに効果的であると考えられる。

以上、『古今和歌集』における「春歌上・下」、「恋歌」以外の「霞」が詠まれる歌を八首取り上げた。その主な特徴として四点を挙げる。

一つ目は、①のように、「霞」、「春」、「雁」の結びつきが見られるということだ。「霞」が立って春が訪れることと「雁」が去っていくことを結びつけたことは、『古今和歌集』収録歌における特徴の一つである。

二つ目は、③、④のように「春霞」から「都」が連想されることがあるということだ。そしてこれは、「都に帰る」、または「都を離れる」場面と関連していることが多い。ここでの「霞」には、霞の先にある「都」への思いや、「都」から離れることに対する詠者の心が託されているのではないかと思う。そして、そのようなことは、「対象そのもの」というより対象に寄せる自らの「心」を詠むものが多い」という『古今和歌集』全体の傾向とも一致すると考える。また、霞がたなびき詠者と都が隔てられることによって、詠者と都との距離が思われることもあり、霞が対象を隠し霞の先にあるものを想像させるということが、歌に効果的に用いられている。「霞」が隠す対象は「花」にとどまらず、「山」や「都」など広がりが見られるということも指摘できる。

三つ目は、⑤、⑥のように「霞」が死者を象徴する歌で用いられることがあるということだ。『古今和歌集』では「霞」の対象を「隠す」という特性が多く用いられていたが、その点に着目すると、「霞」は人をもこの世から永遠に隠してしまうという考え方もできる。

四つ目は、⑧のように「霞」が「浮気な人」を喩えることがあるということだ。『古今和歌集』「恋歌」においても、噂が広がる様子と「霞」が立ち広がる様子を重ね合わせた歌が見られたが、「あちこちにかかり、立っては消える」という「霞」は、「噂」や「浮気な人」を表現するのに効果的な機能を果たすものであると考える。

また、④などは、霞の奥にあるものに心を寄せた歌であると考えられる。ここにも、先述の『古今和歌集』全体の傾向と一致する特徴が見られる。つまり、「霞」が対象を隠したり隔てたりすることによって、対象に寄せる詠者の思いはより一層募るのではないかということである。それらをつまえると、『古今和歌集』において「霞」を詠み込んだ歌が多く見られるのは、「霞」が対象への詠者の思いを募らせるのに効果的な役割を果たすためである、という見方もできるだろう。

『万葉集』と比較して、『古今和歌集』における「霞」の表現は『万葉集』よりも類型化し洗練されると同時に、その

表現の幅は広がっていると見える。たとえば、「霞」と「花」が組み合わせられて詠まれ「隠す」、「隠される」という関係性が意識される点、「霞」から「都」が連想される点、「霞」が死者を象徴している点などである。特に、「隠す」、「隠される」という関係性が強く意識されるようになるのが『古今和歌集』における大きな特徴の一つである。

また、『古今和歌集』において「霞」を詠んだ歌が多く見られるのは、『古今和歌集』全体の傾向と関連があるように思われる。つまり、『古今和歌集』における「過ぎ去りゆくものや過ぎ去りゆく人生を惜しむ姿勢が見られる」ことや「対象そのものを詠むというよりも対象に寄せる自らの「心」を詠む歌が多い」ことなどの特徴と、「霞」の立っては消える性質や「対象を「隠す」という性質を取り込んだ歌の数の多さは、密接に関わっているのではないかということである。立っては消える「霞」が、「花」や「恋い慕う人」などの対象を「隠す」ことで対象に寄せる詠者の「心」に奥行きが生まれ、その表現の幅が広がるのではないだろうか。

第三章 『新古今和歌集』の「霞」

第一節 『新古今和歌集』「春歌上・下」における「霞」

第三章では、『新古今和歌集』の「霞」について考えたい。特に、『万葉集』における表現の系譜をふまえさらに新しい発想を生み出すという傾向が見られる点、絵画的な美しさや幻想的な雰囲気を持つ歌が多い点、「霞」と組み合わせる景物が増える点などを指摘したい。そして、『万葉集』や『古今和歌集』と比較した際の、『新古今和歌集』における「霞」を詠んだ歌の特徴についても考えてみたい。

- ① ほのぼのと春こそ空に来にけらし天の香具山霞たなびく
(二・太上天皇)
- ② 風まぜに雪は降りつつしかすがに霞たなびき春は来にけり
(八・よみ人しらず)
- ③ 天の原富士の煙の春の色霞になびくあけほの空
(三三・前大僧正慈円)
- ④ 朝霞深く見ゆるや煙立つ室の八鳥のわたりなるらん
(三四・藤原清輔朝臣)

⑤ ながの海の霞の間よりながむれば入る日をあらふ沖つ白波

⑥ 霞立つ末の松山ほのほのと波にはなるる横雲の空 (三五・後徳大寺左大臣)

⑦ 知るらめや霞の空をながめつつ花もにはほぬ春を嘆くと (三七・藤原家隆朝臣)

⑧ 大空は梅のほひにかすみつつ曇りも果てぬ春の夜の月 (三九・中務)

⑨ 高瀬さす六田の淀の柳原緑も深くかすみ春かな (四〇・藤原定家朝臣)

⑩ 春風の霞吹き解く絶え間より乱れてなびく青柳の糸 (七二・権中納言公経)

⑪ ゆかん人来ん人しのべ春霞たつたの山の初桜花 (七三・殷富門院大輔)

⑫ 花の色にあまぎる霞立ちまよひ空さへにはふ山桜かな (八五・中納言家持)

⑬ 霞立つ春の山べに桜花あかず散るとや鶯の鳴く (一〇三・権大納言長家)

⑭ 散り散らずおぼつかなきは春霞たなびく山の桜なりけり (一〇九・よみ人しらず)

⑮ 暮れてゆく春のみなとは知らねども霞に落つる宇治の柴舟 (一一五・祝部成仲)

⑯ ①の本歌は「ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも」(万葉集・一八一二)である。天の香具山に

「霞」が「たなびく」様子を詠うことは、香具山を中心に天地に広がる春の気分を壮大に表現することにつながっている。

②は、「しかすがに」という第三句に急所を置いて、冬の季節感と春の季節感との交錯をとらえている。「霞」が「たなびく」様子は、春の到来を表現する代表的なものである。

③からは、一枚の絵画のような優美な情景が色彩とともに想像される。ここでは、風景にとけこんで広がるという「霞」の特性が効果的に用いられているように思う。『新古今和歌集』の叙景歌は、絵画的、幻想的、象徴的、観念的なと評されることが多いが、③からもそのような性質が窺える(注十一)。

④における「室の八島」は水気が煙のように立ちのぼるといふことで歌枕になっていたという。「朝霞」が深く立ち込める様子と湯気が立ちのぼる様子がリンクし、その幻想的な風景が思い浮かべられる。

⑤は、「晚霞」という題で詠んだ歌である。これまで見てきた歌は、「霞」と「山」、「霞」と「花」などの組み合わせが多かったが、⑤では「霞」と「海」や「波」の組み合わせが見られる。「入る日」を隠す「霞」の間から切り取った、「今しも入る日」を洗うような白波」は、絵画のような美しさがある。

⑥の詞書には、「撰政太政大臣家百首歌合に、春曙といふ心をよみ侍りける」とある。⑥で詠者は、春の曙の夢からさめた後の夢かうつつか定かではないような感覚を、優美な言葉とともに詠んでいる。山の景色と海の景色が融合し、複合的な世界観を形成している。

⑦について、本来なら春になると花は咲くと考えられるが、その期待を裏切り花が咲かないという状況に自身の身上を暗示している点に、詠者の発想の広がりやうねりが窺える。またここで詠者は、「霞の空」に自身の晴々としなないれったい心情を投影していると考えることができるといえる。

⑧は、「梅のにはいにかすみつつ」と「曇りも果てぬ」という部分が響き合い、上句と下句の世界観が美しく調和している。

⑨には、「建仁元年三月、歌合に、霞隔遠樹といふことを」という詞書がある。霞が六田の淀の柳原の緑を隔てていという情景とともに、その緑と一つになって霞む春の風景が想像される。

⑩では、「風」が「霞」を吹き解くという趣向が見られる。「霞」が隠す対象は「花」や「桜」ではなく「青柳」であることも⑩の面白さである。

⑪は、春霞が「立つ」ことと「立田山」の「立」をかけている。立田山の初咲きの桜花の愛らしさを慈しんだ歌である。

⑫では、桜の美しさが空にまで広がっていく様子と、霞がその美しさを伝えるように豊かに広がる様子が壮大に表現されている。詠者の視点の広がりも窺える。

⑬は、「霞立つ」「春の山辺」という類型的な表現が見られ、春の山の風景の象徴として「霞」が詠まれている。

⑭では、春霞が桜を隠しているために桜が咲いたかどうかかわからずもどかしく思う詠者の気持ちだが、春霞が広がる不

鮮明な情景と重なる。『古今和歌集』で多く見られた「霞」と「花」の「隠す」、「隠される」という関係が取り込まれ、それに際する詠者の心が窺える。

⑮では、柴舟が霞の中をゆるやかに消えていく様子と、行き着く先もわからない春がかすむように去っていく様子が重なる。ここで「霞」は、切なさや曖昧さ、儂さ、余情を残すことの助になっただけではないかと考える。

以上、『新古今和歌集』『春歌』において「霞」が詠まれる歌十五首を取り上げた。いくつかの歌に共通する特徴を五点挙げる。

一つ目は、①、②、⑬のように『万葉集』における表現の系譜をふまえ、さらに新しい発想を生み出すという傾向が見られる点である。たとえば②では、「風まじりに雪が降り続ける」という冬の季節感と、「霞がたなびき春が来た」という『万葉集』以来の春の季節感が組み合わされているところに新しさがある。『万葉集』の発想を受け継ぎつつ新しい発想を加えて新たな価値を見出すという傾向は、『新古今和歌集』全体において見られるものであると考える。

二つ目は、③、④、⑤、⑥、⑨、⑩などのように、絵画的な美しさや幻想的な雰囲気を持つ歌が多いということである。そしてそのような特徴は、『新古今和歌集』全体の特徴とも一致していると言える。また、霞が風景に調和し、全体で一つの風景としての美しさを持つ歌が多いことも指摘できる。『新古今和歌集』「春歌上・下」では、『古今和歌集』で多く見られたように詠者の心が風景に託されているというよりも、風景の客観的な美しさの方に主眼が置かれていると考えられる。

三つ目は、⑤、⑨、⑩、⑭のように、「霞」が対象を隔てたり隠したりしているという点である。とりわけ⑤や⑩は、「霞」の切れ間から切り取った風景が生き生きと表現されている。しかしここでは、『古今和歌集』で見たような、詠者の対象に寄せる思いや憧れのような感情はあまり見出せない。先述のようにその風景の客観的な美しさの方に主眼が置かれているためではないかと考える。

四つ目は、①、③、⑤、⑥、⑦、⑧、⑫などのように、「霞」と「空」、「霞」と「海」など、「霞」と組み合わせる詠まれる景物が増える点である。①、③、⑥、⑦、⑧、⑫では、『万葉集』や『古今和歌集』ではあまり見られなかった、

「霞」と「空」や「大空」という組み合わせが見られる。⑦は「霞の空」に自身の晴々としなない心境を投影していると考えられることができるが、「霞の空」という表現は、『万葉集』や『古今和歌集』における発想をさらに発展させていることが窺える。また、「霞」と「空」が組み合わせられて詠まれることは、『新古今和歌集』において、対象から一步引いた地点から広がる開けた景色が詠まれることが多いということにもつながっているのではないかと考える。さらに、④、⑤、⑥、⑨、⑮では、水辺の霞が詠まれている。春に山辺に立つものだけでなく、水辺の靄なども含めて「霞」と捉えられ、「霞」という言葉が示す対象に広がりが見られる。

五つ目は、⑮のように「霞」が切なさを醸成し、余情を残すことの一助になっているということだ。このような特徴は、『古今和歌集』において「霞」と「都」が詠まれる歌と共通する部分があると考えられる。つまり、『古今和歌集』では、「霞」が、詠者が都を離れる際の寂しさや心許なさなどを増長させるものとして機能していたが、⑮などにおける「霞」も、遠ざかっていくものに思いを馳せたり、切なさを誘ったりするのに効果的に機能しており、両者に共通する部分があるのではないかとということだ。「霞」は、人々の切なさを増長させ、心情に余韻を持たせる働きをしているのではないかと考えた。

『新古今和歌集』『春歌上・下』において取り上げた歌は、全体的に風景の美しさを詠んだ歌が多かった。「霞」が風景に溶け込み、幻想的で優艶な雰囲気醸し出している。『古今和歌集』では、「対象そのものを詠むというよりも対象に寄せる自らの「心」を詠む歌が多い」という特徴があり、「霞」を詠んだ歌の多さもそのことに関連しているということを指摘したが、『新古今和歌集』『春歌上・下』では、対象に寄せる「心」が詠まれるというよりは「霞」を含めた風景そのものの美しさを詠んだ歌が多く見られた。他の部立ではどうであろうか。第二節では、「春歌上・下」以外における調査を進めてみたい。

第二節 『新古今和歌集』『春歌上・下』以外における「霞」

第二節では、「春歌上・下」以外の部立において「霞」が詠まれる歌とその特徴について考えたい。全十二首を取り

上げるが、特に、哀傷歌において「霞」が詠まれることが多い点、「霞」が対象を「隠す」ものとして機能している点、「雲」との関連で「霞」が詠まれることがある点などについて指摘したい。

① あはれなりわが身の果てや浅緑つひには野への霞と思へば
(哀傷歌・七五八・小野小町)

② 春霞かすみし空のなごりさへ今日を限りの別れなりけり
(哀傷歌・七六六・撰政太政大臣)

③ 立ちのぼる煙をだにも見るべきに霞にまがふ春のあけほの
(哀傷歌・七六七・前左兵衛督惟方)

④ 思へ君燃えし煙にまがひなで立ちおくれたる春の霞を
(哀傷歌・八二二・源三位)

⑤ にはふらん霞のうちの桜花思ひやりても惜しき春かな
(恋歌一・一〇一六・清原元輔)

⑥ 思ひあまりそなたの空をながむれば霞を分けて春雨ぞ降る
(恋歌二・一一〇七・皇太后宮大夫俊成)

⑦ 春霞たなびきわたる折にこそかかる山べはかひもありけれ
(雑歌上・一四四七・東三条入道前撰政太政大臣)

⑧ 紫の雲にもあらで春霞たなびく山のかひはなにぞも
(雑歌上・一四四八・円融院御歌)

⑨ おぼつかな霞立つらん武隈の松のくま漏る春の夜の月
(雑歌上・一四七五・加賀左衛門)

⑩ 須磨の浦のなぎたる朝は目もはるに霞にまがふ海人の釣舟
(雑歌中・一五九八・藤原孝善)

⑪ 見わたせば霞のうちもかすみけり煙たなびく塩竈の浦
(雑歌中・一六一一・藤原家隆朝臣)

⑫ いにしへのなれし雲居をしのぶとや霞を分けて君尋ねけん
(雑歌下・一七二四・よみ人しらず)

①で「野辺の霞」は火葬されて立ちなびく煙を暗示している。②も①と同様に「霞」が火葬の煙を暗示し、火葬の煙となつて消えた母への慕情が惜春の情と融合している。

③では、火葬の煙と霞がまぎれる様子が詠まれ、春の曙の霞む風景とともに亡き人への思いが詠われている。

④の贈歌は、「あはれ君いかなる野への煙にてむなしき空の雲となりけん」(八二一・弁乳母)である。贈歌の「むなしき空の雲」と、④の「立ちおくれたる春の霞」が対応し、「立ちおくれたる春の霞」に詠者自身を暗示している。また、③、④、⑩は「まがふ」という動詞が使われており、他のものに入り混じるといふ「霞」の性質が取り込まれることが多いことが窺える。

⑤では、霞に隠された桜花を「心引かれた美しい女性」に喩えており、同様の趣向は『古今和歌集』においても見られるものであった。霞の中に秘められた花や物越しにみた女性を想像することに伴う心の動きや期待感が表現されている。そしてそれは、「霞」が花を隠し、女性をはつきりとは見ることができないという状況があるからこそ生まれる心情なのだと考える。

⑥では、恋しく思う人の方角の空を見ると「霞」を分けて春雨が降り、おぼろな春の景色はますます霞んでいく。詠者はその空模様と同じようにすつきりとしなないもどかしさを感じ、もの思いに沈んでいる。「霞」と「春雨」という新たな組み合わせも見られる。

⑦の詞書には、「東三条院、女御におはしける時、円融院つねに渡り給ひけるを聞き侍りて、ゆげひの命婦のもとに遣はしける」とある。⑦における「春霞」は円融院を暗示しており、「わたる」は円融院が女御のもとにおいてになるという意味の「渡る」をかけている。そして、詠者自身を「山辺の峽」に喩え、詠者の娘の女御が天皇の寵愛を受けていることへの感謝を「霞」に寄せて詠んでいる。

⑧は、⑦の返歌である。『新編日本古典文学全集43 新古今和歌集』では、「贈歌の「春霞」の心を一転させ、不満の辛い述懐にしている。」と解説されている。詠者は、皇后の異称である「紫の雲」と、「霞」を対比させ、満たされることのない思いを詠んでいる。

⑨からは、月の様子が靡ろではつきりしないことをじれったく思う詠者の気持ちが見える。

⑩では、『新古今和歌集』「春歌上・下」でも見られたように「海」の上の「霞」が詠まれ、静謐な風景の美しさが感じられる。

⑪は、「見わたせば」という開かれた視点から「海辺の霞」を詠んでいる。

⑫において「雲居」は「霞」の縁語であり、「雲居をしのぶ」と「霞を分けて」の通わせ方が巧妙である。

以上、『新古今和歌集』「春歌上・下」以外の部立において「霞」が詠まれる歌十二首を取り上げ、その特徴について考えた。主な特徴として次の四点を挙げる。

一つ目は、①、②、③、④のように哀傷歌において「霞」が詠まれることが多いことだ。ここで「霞」は、『古今和歌集』の場合と同様に「火葬の煙」に喩えられていた。しかし①、④は「霞」に自身の身の上や死を暗示しており、その点に『新古今和歌集』独自の特徴が見られる。

二つ目は、⑤、⑨のように「霞」が対象を「隠す」ものとして機能していることである。ここで、対象となる「花」や「月」は「霞」によりはつきりと見ることはできない。それゆえに詠者は対象の美しさを想像している。ここでは「花」や「月」など美しいものが「霞」に隠されているが、そのような特徴は『古今和歌集』と共通するものでもある。三つ目は、⑧、⑫のように「雲」との関連で「霞」が詠まれることがあるということだ。「霞」は「雲」の縁語であるが、⑧のように「紫の雲（皇后）」と対比されて詠まれることもあった。一方で、⑦のように「春霞」が天皇に喩えられることもあり、「霞」のイメージの多様性が窺える。

四つ目は、⑩、⑪のように、海辺の霞が詠まれることがあるということだ。『新古今和歌集』「春歌上・下」においても水辺の霞が詠まれることが多いことを指摘したが、「春歌上・下」以外においても海辺に静かに霞が漂う情景の美しさが詠まれている。また、「水辺の霞」に関連して、⑥では「霞」と「春雨」の組み合わせが見られた。「霞」と「雨」という組み合わせは『万葉集』や『古今和歌集』ではあまり見られず、『新古今和歌集』において見られる新たな組み合わせであった。

ここまで、第三章を通じ『新古今和歌集』における「霞」が詠まれる歌を取り上げ、その特徴について考えた。第三章全体を通して指摘できることは、『新古今和歌集』では、『万葉集』における「霞」の表現の系譜をふまえつつ新たな発想や価値を見出ししたり、「霞」と組み合わせる景物に広がりが見られたり、叙景歌では絵画的な美しさや幻想的な雰囲気を持つ歌が多く風景そのものの美しさを詠んだ歌が多かったりする、ということである。他のものにまぎれて調和したり、複数のものを橋渡しして融合させたり、風景や人々の心情に余韻を持たせたりするような「霞」の特性や機能が、和歌に効果的に取り入れられているのではないだろうか。『新古今和歌集』全体の特徴として挙げられる「幽玄の美」の理念や、複数の景色が融合するなどの複合的な要素を持つ歌が多いという特徴は、先に指摘した「霞」

の特徴とも関連しているのではないかと考えた。

おわりに

現代において「霞」は、「空气中に広がった水滴やちりが原因で空や遠景がぼんやりする現象」や、「霧や煙がある高さに漂い薄い帯のように見える現象」のことを示すが、和歌史においては、そのイメージや表現、託される心情、組み合わせられる景物など、時代とともに様々な変化や広がりが見られるということがわかった。最後に、『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』それぞれにおける「霞」の特徴を改めてまとめたい。

まず、『万葉集』における特徴は主に三点ある。それは、「霞」が春の風景や春の到来を象徴する点、「霞」の何かを遮るものとしての特性が相手との距離や時間の隔たりを表し、「すっきりしない心情」や「不安な心境」が投影されそれが恋歌にも用いられる点、「花」や「桜」など他の春の景物と組み合わせる場合が少ない点があるという点だ。

次に、『古今和歌集』における特徴は主に五点に集約できる。一つ目は、「霞」と「花」が組み合わせられて詠まれる歌が増え、「霞」が花を隠すものとして機能している点である。二つ目は、「霞」と「色」が結びつき、「霞」が花の色を閉じ込めたり花の色を映し出したりして、はつきりとは見えないものに対する好奇心や憧れをより一層掻き立てるような役割をしている点である。三つ目は、「花」、「風」、「雁」など、「霞」と組み合わせられて詠まれる景物の種類が増える点である。四つ目は、「春霞」から「都」が連想されることがあり、それが「都に帰る」場面や「都を離れる」場面と関連して詠まれることが多い点である。五つ目は、「霞」を火葬の煙に喩え、死者を象徴する歌で用いられる点がある点である。

『万葉集』と『古今和歌集』を比較すると、『古今和歌集』における「霞」の表現は類型化し洗練されると同時に、その表現の幅は広がっているとと言える。そして、『古今和歌集』において「霞」を詠んだ歌の数が多く見られるのは、『古今和歌集』全体の傾向と関連があるのではないかと考えた。『古今和歌集』における「過ぎ去りゆくものや過ぎ去りゆ

く人生を惜しむ姿勢が見られる」ことや、「対象そのものを詠むというよりも対象に寄せる自らの「心」を詠む歌が多い」ことなどの特徴と、「霞」の立っては消える性質や「対象を「隠す」という性質を取り込んだ歌の数の多さは、密接に関わっているのではないだろうか。立っては消える「霞」が、「花」や「恋い慕う人」などの対象を「隠す」ことで、対象に寄せる詠者の「心」に奥行きが生まれ、その表現の幅が広がるのではないかと考えた。

最後に、『新古今和歌集』における特徴は主に四点ある。一つ目は、『万葉集』における「霞」の表現の系譜をふまえ、さらに新しい発想を生み出すという傾向が見られる点である。二つ目は、「空」や「雲」、「海」や「川」など、「霞」と組み合わせて詠まれる景物がさらに増える点である。三つ目は、絵画的な美しさや幻想的な雰囲気を持つ歌が多く、風景の客観的な美しさに主眼が置かれている点である。四つ目は、『古今和歌集』と同様に哀傷歌において「霞」が詠まれることが多く、「霞」に自身の身の上や死を暗示している点である。そして、他のものにまぎれて調和したり、複数のものを橋渡しして融合させたり、風景や人々の心情に余韻を持たせたりするような「霞」の特性や機能が、和歌に効果的に取り入れられているのではないかと考えた。ここで指摘した「霞」の特徴は、『新古今和歌集』全体の特徴として挙げられる「幽玄の美」の理念や、複数の景色が融合するなどの複合的な要素が取り込まれるようになったことなどと関連しているのではないだろうか。

以上のように、和歌史における「霞」のイメージは時代を経るごとに広がりを見せ、その詠まれ方の特徴は歌集全体の傾向と関連しているのではないかとということが指摘できる。単なる事象や景物としての「霞」だけでなく、不鮮明な状況を作り出す「霞」の特性が詠者のじれったい思いを投影したり、「霞」が何かを「隠す」ことにより詠者の心の動きに奥行きが生まれたり、「霞」が複数の景色を橋渡しして融合させたり、時代の経過とともに「霞」の特性や他の景物などを効果的に取り入れた歌が増えていったことが窺える。現代では少し馴染みが薄いようにも思える「霞」であるが、和歌においては様々な場面、心情を表現するのに用いられる汎用性の高い景物であるということが明らかになった。今後は、同時代の物語における影響を考えたり、その後の歌集や詩歌における「霞」の特徴や変化について考察したりすることを課題としたい。

※『万葉集』の引用は『新編日本古典文学全集 8 万葉集①〜④』に、『古今和歌集』の引用は『新編日本古典文学全集 11 古今和歌集』に、『新古今和歌集』の引用は『新編日本古典文学全集 43 新古今和歌集』に拠る。

注

- (注一) 『日本国語大辞典』(小学館、二〇〇二年)
- (注二) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、一九九九年)
- (注三) 鈴木宏子『古今集』における〈景物の組合わせ〉―花を隠す霞・紅葉を染める露―(東京大学国語国文学会編『国語と国文学』第十二巻、一九八九年十二月)
- (注四) (注三) に同じ
- (注五) (注三) に同じ
- (注六) (注三) に同じ
- (注七) 窪田空穂『古今和歌集評釈』(東京堂出版、一九六〇年)
- (注八) 片桐洋一『古今和歌集の研究』(明治書院、一九九一年)
- (注九) 小沢正夫・松田成穂校注訳『新編日本古典文学全集 11 古今和歌集』(小学館、一九九四年)
- (注十) 大野ロベルト「歌ことば「霞」についての一考察―自然と言葉―」(『国際基督教大学学報 3―A アジア文化研究別冊』20号、国際基督教大学アジア文化研究所、二〇一五年)
- (注十一) 佐藤恒雄・馬場あき子『新潮古典文学アルバム 10 新古今和歌集・山家集・金槐和歌集』(新潮社、一九九〇年)